組織神学 1

序論・聖書学・神論

日本聖書学院

目次

クラス概要 i

神学序論 1

神学を学ぶにあたって 2
組織神学とは？ 2
なぜ組織神学を学ぶべきか？ 5
組織神学の土台 7

聖書論 8

啓示とキリスト教的世界観 9
啓示の定義 10
啓示の種類 11
みことばの霊感 12
聖書の権威 15
聖書の無誤性 17
聖書の照明 20
聖書の維持 20

神論 24

神の存在と神の不可知性 25

神の存在 25
神の不可知性 26

神の本質と神の属性 28

神の本質 28
神の独自性：聖さ 29
神の属性 30

神の統一性と三位一体 35

聖書が教える一神論 35
聖書が教える三位一体論 35
神の統一性 37
神の三位一体 38

クラス概要

概要：

このクラス（組織神学１）の目的はクリスチャン生活における組織神学の重要性を理解し、聖書の啓示、霊感、権威、無誤性、及びその維持と、神の存在、本質、属性、唯一性及び三位一体に関する十分な知識を身に付けることにあります。学生はクラスの内容だけでなく、いくつかの神学書からこれらの項目に関する知識を身に付けることが要求されます。

具体的な学習目的：

A. 組織神学と他の神学の分野との違いと関係を説明することができる

B. 組織神学が何を土台としているかを解説することができる

C. 聖書著者の準備に関して、論理的に説明することができる

D. 啓示の種類、違い、関係を説明することができる

E. 霊感とは何かを定義し、その意味を説明することができる

F. 聖霊の内的証明を理解し、なぜこれが権威の根拠であるかを他に挙げられる根拠と比較し説明することができる

G. 聖書の無誤性の意味とその重要性を理解している

H. 聖書の維持に関して、神がどのように働かれたかを説明することができる

I. 聖書の聖典性に関して、一般的な理解と聖書的な理解を説明することができる

J. 神の不可知性を説明することができる

K. 神の本質を挙げることができる

L. 神の属性を挙げ、解説することができる

M. 神の唯一性と三位一体について説明することができる

課題：

学生はこのクラスを修了するために以下の課題を期間内に終了し、提出しなければなりません。

A. 課題図書を読む（提出期限：月日）

1. 『組織神学』ヘンリー・シーセン著（52-56; 196-241ページ）

2. 『キリスト教神学　第二巻』ミラード・エリクソン著　（6-54ページ）

課題図書は提出期限までに完読してください。完読できなかった場合は、読み終わった時の日付を講師に連絡してください。クラス終了日（8月15日）までに完読できなかった場合は、どこまで読んだかを明記して講師に知らせてください。

B. テスト（提出期限：月日）

講義終了後にメールにてテストを配信します。受講生は9/20〜29の間に講師にメールにてテストの配信を依頼してください。テストは指定時間（1時間半）で必ず終了し、メールに添付して返信してください。聖書を用いることは許可しますが、ノートや自分のまとめなどを参照して回答することはできません。主が見ている前でテストを受けることをしっかりと覚え、不正をしないように試験を受けましょう。

C. プロジェクト（提出期限：月日）

神の本質・属性の中から二つの本質・属性を取り上げ、それらについてレポートを書いてください。このレポートは、聖書研究会や学びなどで教えることを前提にまとめてください。クラスで学んだことに加えて、聖書箇所や神学書などを用いて、教えることを完全原稿にして書くか、または詳細を記したアウトライン形式で書いてください。

クラススケジュール：

クラスは講義前・講義中・講義後という三部構成になっています。以下はその詳細です。

A. 講義前

受講登録（月日〜月日）

受講前課題提出準備（月日〜月日）

B. 講義

月日（金）	19:30〜22:00
月日（土）	09:00〜12:00
	13:00〜18:00
月日（日）	14:00〜18:30

C. 講義後

課題提出準備（月日〜月日）

テスト提出（月日）

全課題提出（月日）

成績：

成績は日本聖書学院学生要項に記されている成績基準に沿って判断されます。このクラスにおけるそれぞれの課題の比重は以下の通りです。

必読書	20%	出席＋クラスへの参加及び態度	10%
プロジェクト	35%	テスト	35%

神学序論

I. 神学を学ぶにあたって

II. 組織神学とは？

A. 神学の種類

1. 聖書神学

聖書神学は、個別の筆者及び聖書の区分を特に注目し、聖書が完成していく過程の中でそれぞれの教えを理解し捉えようとする神学である。

2. 歴史神学

歴史神学は、使徒の時代から現代に至るまでのキリスト教教理の発展をたどり、それらの発展によって教会にもたらされた結果を考える神学である。

3. 哲学神学

哲学神学は聖書の教え以外の哲学的な情報を取り入れ神学を形成する神学である。

4. 実践神学

実践神学は、未信者の救い、信徒の聖化、教化、及び奉仕の為に神学することによって導き出された真理の適用である。

5. 組織神学

a. 定義

組織神学とは、特定の論題に対して「_____が教えていることは何か」を答えるものです。これには、聖書に記されている関連箇所を全て____し、____し、____し、特定の論題に関して何をどのように信じるべきなのかを_____ことが必要です。

b. 目標

(1) 神、そして神と世の関係について記されているあらゆる事実を発見し理解する

(2) これらの事実を組織化する

(3) これらの事実を人の生涯に適用する

c. JBA での学びの区分

クラス	内容
組織神学１	序論、聖書論、神論
組織神学２	キリスト論、聖霊論、天使論
組織神学３	人間論、罪論、救済論
組織神学４	教会論、終末論

B. 聖書と各種神学とそれぞれの関係

神学の根幹を支えているのは聖書です。それゆえに、あらゆる種類の神学は聖書の教えに根ざしたものでなければなりません。しかし残念なことに近年のキリスト教会では、この大切な真理が重要視されなくなって来ました。組織神学が聖書神学を支配し、実践神学が聖書の真理を否定する場面を教会の中に見受けるようになりました。ここに潜んでいる危険はあまりにも大きなものであるので、私たちはそれを無視したり、軽視したりするべきではありません。このような危険が教会の中に入らないためにも、私たちは聖書と各種神学の関係を明確に理解しなければならないのです。

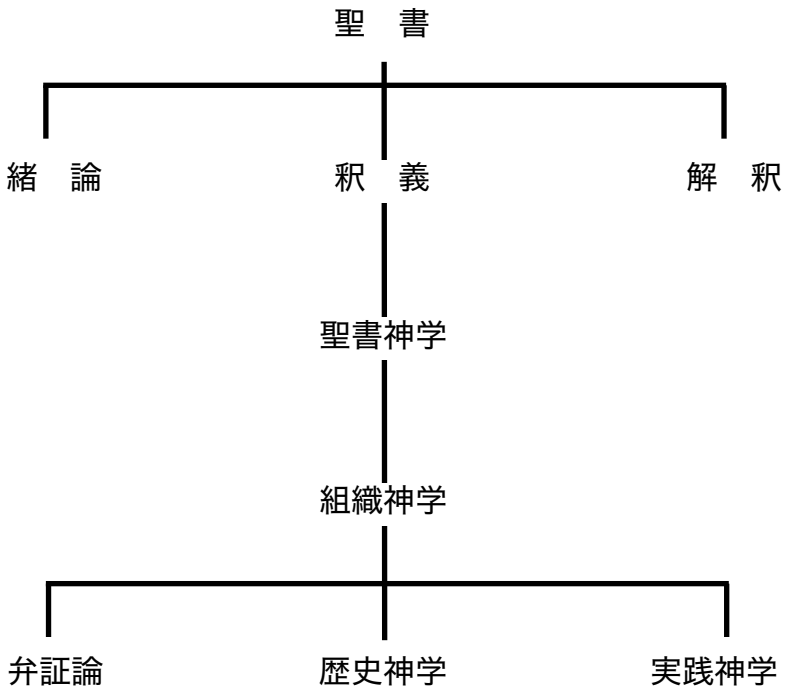


図1：聖書と神学の関係

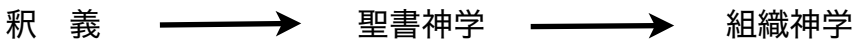


図2：神学の流れ

聖書神学	組織神学
聖書からのみ真理を見出す	聖書と聖書外から真理を見出す
聖書の一部を吟味する	聖書全体を吟味する
特定の著者（ヨハネやパウロ）または特定の時代（アブラハム、モーセ、預言者）から教理を考え整理する	聖書全体から教理をまとめ整理する
なぜ、どのように教理が発展していったのかを探求する	最終的に何が教えられているのかを探求する
結果だけでなくその過程を理解することに努める	結果を理解することに努める
それぞれの時代背景の中で啓示の漸進性を考える（エデン時代、ノアの時代など）	啓示が完成したものとして考える

図3：聖書神学と組織神学の違い

III. なぜ組織神学を学ぶべきか？

A. 一般的な理由

1. 教理の確認

2. 釈義の結果

3. メッセージでの使用

4. 弁証での使用

5. 伝道での使用

B. 聖書的理由

1. _____の成就のため

2. _____に益をもたらすため

3. 聖書をより良く_____ため

C. 組織神学の必要性

1. 組織神学の必要性を否定する理由

2. 組織神学が必要である理由

3. 組織神学に必要なこと

   a. 組織神学は理解されなければならない

   b. 組織神学は人々の生活に関わりのあるものでなければならない

   c. 組織神学は個人的なものでなければならない

IV.組織神学の土台

A. 一般啓示

B. 体験

C. 伝統

D. 合理(理知)主義

1. 支持者

2. 理知論の危険
   a.
   b.
   c.

3. 思考力の目的
   a.
   b.
   c.

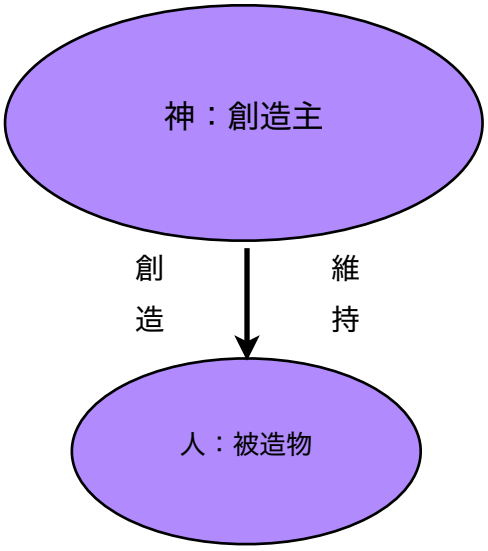
E. 神のことば（書き記された生けるみことば）

聖書論

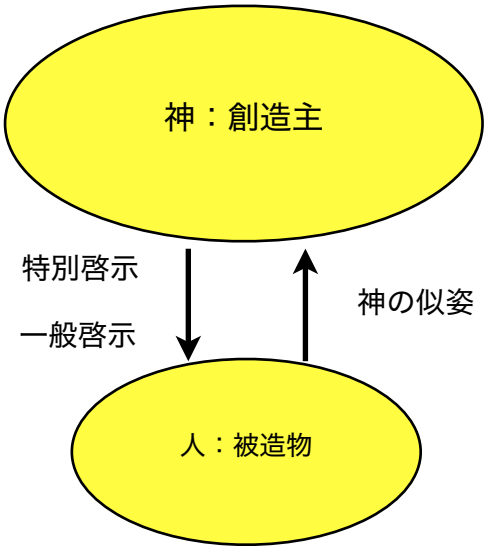
I. 啓示とキリスト教的世界観

A. 啓示の必要性

1. 存在論的必要



2. 認識論的必要



B. 啓示の順応性

C. 啓示の限界

II. 啓示の定義

A. 啓示の定義

1. 「啓示」という言葉の聖書的意味

2. 啓示とは人の発見ではなく、神の開示である

神がご自身を現してくださらない限り、私たちは真理を知ることができない。いつ、どこで、誰に、どのような啓示を与えるかは神が定めることであるがゆえに、私たちはこの真理を理解するときに、高慢になるのではなく、謙遜と感謝の内に神を称えるのである

B. 聖書からの例

1. 詩篇19篇

2. ローマ1章

3. マタイ11:25–27

4. マタイ16:13–17

5. ガラテヤ1:11–12

C. 啓示が与えられた理由

1. 神の卓越性

2. 有限で罪深い人間の性質

III. 啓示の種類

A. 一般啓示

1. 一般啓示の手段
   a. 被造物
   b. 良心
2. 一般啓示の役割
3. 一般啓示に関する結論

人は一般啓示だけで救いに至ることができるか

聖書には一般啓示が救いに至る神の知識を与えることを明確に示す箇所はない。

- ✦ 聖書は人が神を求めないことを教えている（ローマ3:11-12）
- ✦ 聖書は一般啓示が部分的なものであり、罪によって曖昧になっていることを教えている（ローマ8:19-22）
- ✦ 聖書は一般啓示の結果は罪人の有罪宣告であることを教えている（ローマ1:18-21）
- ✦ 聖書はキリストによってのみ救いがもたらされることを教えている（ヨハネ14:6）
- ✦ 聖書は信仰は神のことばを聞くことによってもたらされることを教えている（ローマ10:9-10，13，17）

B. 特別啓示

1. 特別啓示の手段
   a. 神との対話
   b. 神の御業
   c. 命題的啓示（神のみ告げ）
   d. 受肉
2. 特別啓示の役割

特別啓示の具体例

人となられたことば

- ❖ 完全な啓示（コロサイ2:9）
- ❖ 完璧な啓示（ヘブル1:2-3）
- ❖ 究極の啓示（ヨハネ14:8-9）

書かれたことば

- ✦ 神が直接語ったことば（主の御告げ）
- ✦ 夢とまぼろし（創世記28:10-17; 使徒10）
- ✦ 神とキリストの顕現（創世記16:7-13）
- ✦ 神の奇蹟（出エジプト14:13-31）
- ✦ 預言者や使徒たちに与える内側の思い（Ｉコリント2:6-13）
- ✦ 天使の働き（使徒5:19-20）
- ✦ イエスの生涯と教え（ヨハネ20:30-31）

IV.みことばの霊感

A. 霊感の聖書的説明

1. 定義

> 昔、聖霊が原著者たちに働いて、用いたことば使いにいたるまで指揮を与え、また同様にかれらがどんな脱・誤も犯さぬように保護した解明しえない力
>
> ガウンゼン（ヘンリー・シーセン『組織神学』178頁）

> 聖書の霊感とは、聖書記者たちに対する聖霊の超自然的影響を意味する。そのことによって、彼らの文書を啓示の正確な記録とし、また彼らの書いたものを実際神の言葉であるように結実させたのである。
>
> ミラード・エリクソン『キリスト教神学』254頁）

> 霊感とは、著者が独自のスタイルや個性に基づいて書き記しながらも、その結果が権威的で完全な信頼を置くことができる一切の誤りのない書かれた神の言葉となるように、著者に対してなされた聖霊の指揮監督である。
>
> ポール・エンズ “The Moody Handbook of Theology” 161頁）

> 霊感とは…聖霊によって聖著の著者たちに及ぼされた超自然的影響である。それによって彼らの著書は神的信頼性が与えられたのである。
>
> B・ウォーフィールド “The Inspiration and Authority of the Bible” 131頁）

> 神は聖書の著者たちを指揮監督し、その結果彼らは一切の誤り無しに神の人に対するメッセージを原著において執筆し、記録した。
>
> チャールズ・C・ ライリー “Basic Theology” 38頁）

2. 霊感の意味（Ⅱテモテ3:16）

a. 「_____」の意味

b. 「____」の意味

重要 :: なにが霊感を受けているのか？

c. 「_____」の意味

B. 聖書著者の準備

1. 著者は神の似姿に造られた全ての人と_____を持っていた

2. 著者独特の視点は_____整えられていた
   a. 神の摂理は遠い先祖にまで及んでいた

   b. 神の摂理は各著者の独特の視点をもたらせた
      (1)
      (2)
      (3)
   c. 神の摂理は人生の様々な部分を含んでいた
      (1)
      (2)
      (3)
      (4)

著者の取材や執筆は<u>超自然的監督の下で</u>行われた

3. 著者は_____動かされた（Ⅱペテロ1:20–21）
   a. 「預言のことば」の卓越性

   b. みことばの起源

   c. 「聖霊に動かされる」

4. 著者は_____に加えて、神によって_____いた（Ⅰコリント2:6–13）

C. 霊感の証拠

1. 旧約聖書の証拠
   a. 旧約聖書は神が人々に直接語った言葉を記録している（例：出20:1-4; 創12:1-3）
   b. 旧約聖書は預言の言葉を記録している（人を通して神のことばが語られる）
      (1) 預言者たちは神の正式なメッセンジャーとして見られている
      (2) 預言者は神のことばを語る（出4:12; 申18:18–22; Ⅱサム23:2）
      (3) 預言者は神のことばを一人称で語る（Ⅰ列王20:13）
   c. 旧約聖書は書き留められた神のことばについて記録している
      (1) いくつかの箇所で、書き留められたものが神のことばとして受け入れられているのを見ることができる（出17:14; 24:3-4）
      (2) 預言を書き留める命令（エレミヤ30:2）
2. 旧約聖書に対する新約聖書の見解
   a. 多くの旧約聖書箇所が神の語ったことばとして認識されている（マタイ1:22）
   b. 旧約聖書の一言一句が信頼の置けるものとして理解されている（マタイ22:44-55）
   c. 旧約聖書の細かな預言がキリストの生涯を通して成就されていると考えている（マタイ2:5; 参照ミカ5:2）
   d. 旧約聖書の些細な歴史的詳細が信頼できるものとして捉えられている（マタイ12:3-4; 40-42）
   e. 旧約聖書全体が信頼の置けるものされている（ルカ24:25, 27, 44）
3. 神のことばとしての新約聖書
   a. 新約聖書は神の直接的啓示を記している
   b. 新約聖書はキリストと使徒を通して語られた神のことばを記している（ルカ5:1; ヨハネ3:34; 6:63, 68; 使徒4:29, 31; Ⅱコリント13:3）
4. 旧約聖書の霊感に関するキリストの証言
   a. 絶対的権威（マタイ21:13, 16, 42）
   b. 必ず成就するもの（マタイ26:31, 54, 64-65）
   c. 奇蹟の正確な記録（ルカ4:27）
   d. 一貫して正確（マタイ5:18; ヨハネ10:35; ルカ24:25-27）
5. 新約聖書の霊感に関するキリストの証言
   a. イエスは啓示を完成せずに昇天された（ヨハネ16:12）
   b. イエスは聖書の啓示の完成を預言された（ヨハネ16:13）

c. イエスは新約聖書を事前認証していた（ヨハネ16:13; 使徒1:8）

6. 聖書の霊感に関する使徒たちの証言

a. 使徒たちは継続して旧約聖書を用いて福音の正当性を証明した（Ｉコリント15:3-4）

b. 使徒たちの言葉と教えは聖書によってその正しさを確認していた（使徒17:11）

c. 使徒たちは旧約聖書の預言が成就することを前提としていた（使徒1:16）

d. 使徒たちは神と聖書を結びつけて考えていた（ローマ9:17）

e. 使徒たちは聖書を「神のことば」と考えていた（ローマ3:8）

f. 使徒たちは他の聖書著者たちを認めていた（Ⅱペテロ3:15-16; Ｉテモテ5:18 [参照]ルカ10:7

g. 使徒たちは自分たちの著書を神からのものであると捉えていた（Ｉコリント14:37-38; 2:13; Ｉテサロニケ2:13）

7. 使徒ではない新約聖書の著者たち

a. 初代教会には使徒ではない預言者が存在した（使徒11:27; 13:1; 15:32; エペソ4:11）

b. これらの預言者は神からの啓示を受け、ある者たちはそれらを書き留めた

c. 執筆した預言者たちは、キリストや使徒との近い関係を持った者であった

d. パウロはルカの著書を承認した（Ｉテモテ5:8)

V. 聖書の権威

A. 人が聖書を信頼することができる根拠

1. _____証拠

2. ____の権威

3. ____主義

4. 聖霊の内的証明

B. 聖霊の内的証明の聖書的根拠

1. 聖書は_____なものである（霊感の証拠を参照）

2. 聖霊はその力を聖書の真理にもたらす（Ｉコリント2:4-14）

C. 聖霊の内的証明の説明

1. 聖霊の内的証明は_____を教える

聖霊がみことばを通して聖書の信頼性を証明し、聖書が神のことばであるという確信を私たちに与える働き

2. この聖霊の働きがなければ、聖書が神の絶対的真理であることを確信することはできない

3. 聖書は客観的に聖書が神のことばであることの証明を与えている

4. 聖書の自己証明は明瞭なものであるが、それだけでは確かな信仰をもたらすことができない

5. 聖霊の内的証明は人の心（思い）に対して働きかけ、聖書の自己証明に委ねる決断をさせる

6. つまり、聖霊は聖書が権威的な神の霊感による書物であることを確信させる

7. この働きは最終的に人の新生をもたらす

VI.聖書の無誤性

A. 定義

無誤性とは、全ての情報が正確に出された時、聖書は原文において（それが正しく解釈されるとき）教理的、道徳的、社会的、科学的などのあらゆる事柄において完全に真理であることである（ポール•ファインバーグ）。

無誤性とは、聖書が原文において事実とは異なることを一切書き記していないことである（ウェイン•グルーデム）

B. 無誤性の聖書的根拠

1. ____に関する聖書の教え（Ⅱテモテ3:16）

2. _____に関する聖書の教え（マタイ5:17-19）

3. 聖書がどのように聖句を用いているか
   a. 一つの単語に重点が置かれている（マタイ22:43-45）

   b. 動詞の時制に重点が置かれている（マタイ22:32）

   c. 名詞の単数／複数に重点が置かれている（ガラテヤ3:16）

4. 神の特徴に関する聖書の教え
   a. みことばを息吹いた父なる神は真実の方である

   b. 新約の著者たちに真理をもたらした子なる神は真実な方である

   c. 霊感をもたらした聖霊なる神は真実な方である

   d. 神によって書かれたみことばは真実であると言われている

C. 無誤性に関する説明

1. 無誤性とは聖書的、神学的に主張されていることだが、聖書から必ずしも立証できるものではない
   a. 検証するために必要なデータがそろっていないために、内容を立証することも反証することもできない

b. それゆえにクリスチャンには次の二つの選択がある

(1) 著者に対する神の監督は不十分で、それゆえに聖書には間違いがあると考える

(2) 全知全能の神のことばを信頼し、神が著者を完全に監督したがゆえに間違いがないと考える

2. 無誤性は著者によって記された原本においてのみ適用される

a. 写本には伝達・翻訳の過程の中で間違いが含まれることがある

b. しかし写本や翻訳は派生的に無誤性を帯びている

c. 自由主義批評家たちは間違いに満ちた原本が間違いに満ちた写本・翻訳を生み出したと考える

d. 福音主義は無誤の原本の存在と、写本に対する注意深い原文批評によってほぼ完全に近い写本を今日手にすることができると考える

3. 無誤性は日常的な言葉を使っていることによって否定されない

4. 正確な引用がされていなくても無誤である

5. 一つの出来事がかいつまんで記されていたとしても、それは無誤性を否定しない

6. 不自然な文法的表現が用いられていたとしても、それは無誤性を否定しない

VII.聖書の照明

A. 定義

B. 照明の必要性

1. 霊的真理に対する嫌悪（ヨハネ3:19–21）

2. 霊的真理に対する盲目（Ⅱコリント4:4）

C. 照明の結果

VIII.聖書の維持

A. 聖書の維持とは

B. 維持に関する聖書の教え

1. 写本は神のことばと考えられていた
   a. 旧約：申命記17:18-20; エズラ7:14

b. 新約：Ⅰテモテ4:13; Ⅱテモテ3:16-17; 使徒17:2

2. 写本は原本と同じでなければならない

a. 神からの命令（出エジプト34:27-28）

b. 神からの警告

3. 維持は超自然的な働きではなく摂理的な働きである

4. 神は人を使って聖書を維持してこられた（エレミヤ36:1-32）

5. 神は人が熱心に聖書を維持することを求めている

6. 旧約聖書の一部は現存しない

7. 聖書が純粋な形で維持されてきたことの客観的証拠が存在する

C. 聖典

1. 聖典の必要性

a. 聖典はどれが聖書なのかを定めるために必要なのではない

b. 聖典はどれが聖書ではないのかを定めるために必要である

2. 聖典の存在
   a. 旧約聖書

   b. 新約聖書

3. 聖典の確立
   a. 神について証言できるのは神だけである（ヘブル6:13）

   b. 神は啓示の終わりを宣言されている
      (1) 旧約（マラキ4:4–6）

      (2) 新約（黙示録22:18–19）

   c. 神は特定の人物を通してのみ啓示を与える

   d. 神の啓示は一貫したもので矛盾がない

   e. 神の啓示は神の民によって受け入れられた

4. 聖典に関する注意点

   a. 聖典性を量る最も重要な基準　—　著者

   b. 啓示の終了に関する神の宣言

   c. 聖典認証の過程は聖典を確立したのではなく、すでに確立していたものを主張したに過ぎない

神論

神の存在と神の不可知性

神は存在するのか？どうしたら神の存在が分かるのか？

I. 神の存在

A. 神秘主義的な証明

B. 論理主義的な証明

1. _____的証明

2. _____的証明

3. _____的証明

4. _____的証明

C. 一般的な証明方法の問題点

1. 論理的証明では、神の存在の_____するだけで_____はできない

2. 証明する神は_____かまわない

3. 人が神の存在に関して_____にあることを前提にしている

4. 論理的証明ではなく、_____神を知ることができる

D. 聖書的な証明

1. 人はみな、_____を知っている

2. _____と____が神の存在を教える

3. _____には限界がある

II. 神の不可知性

A. 定義

神は無限の方であり、人は有限な存在であるがゆえに、人が神を完全に理解することはあり得ない（ウェイン•グルーデム）

1. 神学的根拠
   a. 人間は本質において神とは異なる存在である
   b. 人間は知識において神とは異なる思考レベルにある
   c. 人間は神とは本質においても知識においても異なる存在である

2. 説明
   a. 神を全く知ることができないということではない

b. 神の偉大さや知識を完全に理解することはできないということである（イザヤ55:9）

c. 神の性質や本性を知ることはできるが、決して神を余すところなく知ることはない

d. しかし、聖書から学ぶことができる真理を私たちは持っているがゆえに、私たちは神を完全に知ることはできないが、神を正しく知ることはできる

神の本質と神の属性

神はどのような方なのか？

I. 神の本質

A. 神は本質的に霊なる方である -- ヨハネ4:24

B. 神は本質的に見ることのできない霊なる方である -- Ｉテモテ1:17; 6:16

C. 神は本質的に人格を持った不可視な霊なる方である

1. 存在の自覚 -- 出エジプト3:14

2. 知性 -- ローマ11:33

3. 目的 -- エペソ3:11

D. 神は本質的に人格を持った不可視な生ける霊なる方である -- Ｉテサロニケ1:9

E. 神は本質的に無限な方である

1. ____において -- Ⅰ列王記8:27; 使徒17:24-28

2. ____において -- 詩篇90:2

3. その他

II. 神の独自性：聖さ

A. 言葉の意味 -- 「切り離す」「分離」

B. 聖さの二つの意味合い

1. 存在上の聖さ
   - イザヤ57:15
   - エゼキエル36:20-23

2. 道徳上の聖さ

このように神の聖さを理解するならば、これが他の神独特の属性を横並びにして理解されるべきものではないということがよく分かります。聖さは、神を現し、特徴付ける全てのものに見ることができるものであり、神はその良さと恵みにおいても聖なる方であり、同じように義と怒りに説いても聖なる方なのです。（G. ヴォス）

III. 神の属性

A. 神だけが持っている属性

1. 神は____する方である -- 出エジプト3:14; 詩篇36:9; ヨハネ5:26; 使徒17:25

2. 神は_____な方である -- 詩篇50:4–15; イザヤ40:12–17; 使徒17:24–25

3. 神は____な方である -- ヨブ11:7–9; 詩篇147:5

   a. ____ -- 創世記21:33; 申命記33:27; 詩篇90:1–2; 102:12, 26–27; イザヤ9:6; 41:4; 57:15; ハバクク1:12; Ⅰテモテ1:17; 黙示録1:4, 8; 4:10

   b. ____ -- Ⅰ列王8:27; Ⅱ歴代誌2:6; 詩篇139:7-10; イザヤ57:15; エレミヤ23:23; 使徒17:27

   c. ____ -- Ⅱ歴代誌16:9; ヨブ26:6; 28:24; 詩篇33:13–15; 139:1-6, 15; 147:5; イザヤ46:10; マタイ6:8; 10:30; 使徒1:24; ローマ11:33; ヘブル4:13; Ⅰヨハネ3:20

      (1) 神はご自身を完全に知っておられる（Ⅰコリント2:10-11）

      (2) 神は実存するもの全てを完全に知っておられる

(3) 神は全ての可能性を知っている（マタイ11:21-24）

(4) 神は未来を知っている（イザヤ44:28; 45:1; 46:9-10）

d. ____ -- 出エジプト6:3; ヨブ42:2; イザヤ40:28; エレミヤ32:17; ダニエル3:17; マタイ19:26; 黙示録11:17; 19:6

4. 神は____な方である -- 詩篇33:11; 102:25–32; エゼキエル24:14; マラキ3:6; Ⅱテモテ2:13; テトス1:2; ヘブル6:17–18; ヤコブ1:17

a. 聖書の宣言

(1) 神は変わらない（詩篇102:26; マラキ3:6; ヤコブ1:17）

(2) 神の真実は変わらない（民数記23:19）

(3) 神の計画は変わらない（詩篇33:11）

(4) 神の憐れみは変わらない（詩篇103:17）

(5) 神の約束は変わらない（Ⅱコリント1:20）

b. 聖書の中に見ることができる変化に関して

(1) 全ての変化は不変性を曲げるものではない

(2) ある変化は擬人観的表現である

(3) ある変化は状況の変化によってもたらされる

(4) ある変化は罪のゆえに起こった関係と態度の変化による

(5) ある変化は神の贖いの計画に基づく変化である

5. 神は_____な方である -- ヨブ11:7–9; 詩篇145:3; イザヤ40:25; 55:8–9; ローマ11:33–36

B. 人が持てる属性

1. __

   a. 神は常に正しいことに基づいて行動し、事実神ご自身が義の究極的な基準である

   b. 義とは神の道徳的純潔であり、道徳的被造物との関係に適用されるものである

   c. 特定の行動を義と定める基準は何か？

2. ____

   a. 正義には罰が含まれる

   b. 正義には報酬が含まれる

3. ____

   a. 本物 -- エレミヤ10; イザヤ44:14-20

b. 真実 -- テトス1:2

c. 誠実 -- Ⅰテサロニケ5:24; Ⅰヨハネ1:9

4. __

a. 定義

> 神の愛は、神が永遠に自らを与えること、もしくは分かち合うことと考えることができる。（エリクソン）

> 神の愛とは、神が永遠に自らを他者のために捧げることである。（グルーデム）

b. 神の愛の対象

(1)

(2)

(3)

(4)

c. 神の愛の実証

(1)

(2)

(3)

(4)

d. 神の愛の説明

(1) 意志に基づく愛（Ⅰヨハネ4:10）

(2) 無私の愛（申命記7:7–8）

(3) 義なる愛（詩篇11:7）

(4) 永遠の愛（エレミヤ31:3）

5. ____

   a. 一般恩寵 -- 詩篇145:9; 創世記6:3; マタイ5:44–45

   b. 救いの恵み

   c. 恵みの現れ

6. _____

   a. 神のみこころのままに与えられる（ローマ9:18）

   b. 無限のあわれみである（民数記14:18; 詩篇86:5; エペソ2:4; ヤコブ5:11; Ｉペテロ1:3）

C. 主要な属性はあるのか

神の統一性と三位一体

神は唯一なのか？

I. 聖書が教える一神論

A. 旧約聖書の宣言

B. 新約聖書の宣言

II. 聖書が教える三位一体論

A. 新約聖書が提示する疑問

1. ヨハネ17:3
2. Ｉコリント 8:6
3. ヨハネ1:1–3

B. 聖書が示す三位一体の宣言

1. マタイ28:19
2. IIコリント13:14
3. マタイ3:13–17
4. エペソ4:4–6

C. 教会史に見る三位一体論

1. 教会史における進展

2. 一神論を強調する異端的教え（モナルキア主義）
   a. 動的モナルキア主義・従属主義（アリウス - Arius）

   b. 様態的モナルキア主義・様態論（サベリウス - Sabelllius）

3. 教会によるモナルキア主義の否定
   a. 様態的モナルキア主義の否定

   b. ニカイア（ニケア）公会議（325）
      (1) 最大の問題点：イエスの神性
         (a) アリウス派

         (b) アタナシウス

         (c) 中間派

      (2) 結論

> 我等は、全ての見ゆるものと見えざるものとの創造者にして、全能の父なる唯一の神を信ず。
> 我等は、唯一の主イエス•キリストを信ず。主は神の御子、父より生れ給いし独り子、即ち御神の本質より出で給いし者、神の神、光よりの光、真の神よりの真の神、造られずして生れ、御父と本質を一つにし、天にあるものも地にあるものも万のものこれによりて造られたり。主は我等人類のためにまた我等の救いのために降り肉体を受け人となり、苦難を受け、三日目に甦り、天に昇り給い、生ける者と死ねる者とを審かんために来り給わん。
> 我等は聖霊を信ず。
> 主の在りし給わざりし時あり、生れざれし前には在さず、また、在らざるものより造られ給いたりといい、異なる存在、また本質より成り、（造られしもの）神の変じ化へ得べき子なりと言う者、かかる者等を公同なる使徒的教会は呪うべし。
>
> （東京基督教研究所訳）

c. コンスタンティノポリス公会議（381）

(1) 最大の問題点：聖霊の神性

(2) 結論

わたしたちは、唯一の神、全能の父、天と地と、見えるものと見えないものすべての造り主を信じます。
わたしたちは、唯一の主、神の独り子、イエス・キリストを信じます。主はすべての時に先立って、父より生まれ、光よりの光、まことの神よりのまことの神、造られずに生まれ、父と同質であり、すべてのものはこの方によって造られました。主は、わたしたち人間のため、またわたしたちの救いのために、天より降り、聖霊によって、おとめマリアより肉体を取って、人となり、わたしたちのためにポンティオ・ピラトのもとで十字架につけられ、苦しみを受け、葬られ、聖書に従って、三日目によみがえり、天に昇られました。そして父の右に座し、生きている者と死んだ者とをさばくために、栄光をもって再び来られます。その御国は終わることがありません。
わたしたちは、主であり、命を与える聖霊を信じます。聖霊は、父と子から出て、父と子とともに礼拝され、あがめられ、預言者を通して語ってこられました。わたしたちは、唯一の、聖なる、公同の、使徒的教会を信じます。わたしたちは、罪のゆるしのための唯一の洗礼を、信じ告白します。わたしたちは、死人のよみがえりと来るべき世の命を待ち望みます。
アーメン
（日本基督教団改革長老教会協議会教会研究所訳）

III. 神の統一性

A. 説明

1. 神はその本質（存在）において唯一である

2. 神の本質の全てはそれぞれの三位格にある

3. 神の本質は三位格よりも先にも後にもならない

4. 神の本質は区分することができる

B. 聖書の教え

1. 三位格それぞれが神である
   a. 父なる神は神である（ヨハネ6:27）
   b. 子なる神は神である（ヨハネ1:1; ヘブル1:8）
   c. 聖霊なる神は神である（Ｉコリント3:16）
2. 三位格の神は唯一の神である
   a. 父と子はひとつである（ヨハネ10:30, 33）
   b. 父と聖霊はひとつである（Ｉコリント3:16）
   c. 子と聖霊はひとつである（ローマ8:9）
   d. 父と子と聖霊はひとつである（ヨハネ14:16-18, 23）

IV.神の三位一体

A. 定義

三位一体の教理はキリスト教信仰の中心的事実であるが、これはまた人間の理解を越えたことでもあり、人間の体験のうちにはこれと似たものは全くない。神は一つであると同時に三つの位格として存在すると信じること、というのが最上の定義であろう。
（ルイス・スペリー・シェイファー）

三位一体とは、一つの神の本質のうちに、父、子、みたまとしてそれぞれ知られている三つの永遠の区別があるということである。この三つの区別は三つの人格であって、それゆえわれわれは神の三位格について語るのである。
（ヘンリー・シーセン）

三位一体に関する正統的解釈（神は唯一である、しかし三位格である）は矛盾しているように思われるが、そのように見えるだけで、実際は矛盾ではない。もし何かが同時に同じ観点から見てＡであり、かつＡではないとしたら、矛盾が存在する ．．．正統主義は神の統一性も主張しながら、神が三位格であられるあり方が、神が一つであられるあり方とはいくつかの点において異なっていることを示すことで、問題に対処する
（ミラード・エリクソン）

神はその本質において唯一な方であり、この本質は完全に、平等に、同時に、永遠に区分されることなく、また重複することなく、父、子、聖霊という三位一体の神の全ての位格に存続する。

B. 三位格に関する旧約聖書の示唆

1. 「エロヒーム」という単語

2. 「エロヒーム」に対する複数形動詞の使用

3. 神に対する複数形代名詞の使用

4. 神の名前が複数の人物に対して一つの箇所で使われている

5. 三位格が示唆される箇所がある

6. 「主の御使い」が神の複数人格を示唆している

7. 「メシア」が神だと言われている

C. 新しい契約の啓示にみる三位一体

1. 古い契約の環境では第二位格と第三位格の啓示を十分に適合することができない

2. 三位一体は新約聖書のはじめから前提とされている
   a. イエスは福音書の中で受肉した神として描かれている（マタイ1:23; マルコ2:5-12）

   b. 聖霊はキリストの初期の働きの中でより明確に啓示されている（マタイ1:20; 3:11, 3:16; 4:1）

   c. 三位一体の十分な啓示は新しい契約という福音と密接な関係がある

3. イエスは、父としての神との新しい関係を持つことができることを人々に紹介した（ヨハネ5:18; 15:15）
   a. 旧約時代に人々は恐れ震えながら神に近づいた
   b. 至聖所を遮っていた幕がやぶられた

4. 新しい契約は人に神を内側から知る機会をもたらした（ガラテヤ4:6）
   a. 旧約の信徒は神を外側からしか知らなかった
   b. クリスチャンは聖霊の内住を受け、神をより身近に知ることができる

5. 三位一体は神の内面の事柄であり、神のうちに入れられた者だけが知ることのできるものである

D. 三位一体に関する聖書的証拠

1. 旧約聖書の示唆（上記参照）

2. 三位一体が直接的に告げられている箇所
   a. 大宣教命令（マタイ28:19）

   b. 使徒の祝祷（Ⅱコリント13:14）

3. 三位一体が間接的に告げられている箇所
   a. 書簡
      (1) ローマ15:16

      (2) ローマ15:30

      (3) Ⅱコリント1:21

(4) エペソ2:18

b. ヨハネの福音書

4. その他の証拠

a. 聖書箇所の中で登場する順番に特定の決まりがなく、存在において順位がないことを見ることができる

神/父	キリスト/子	聖霊	２回
神/父	聖霊	キリスト/子	４回
キリスト/子	神/父	聖霊	４回
キリスト/子	聖霊	神/父	３回
聖霊	神/父	キリスト/子	1回
聖霊	キリスト/子	神/父	０回

b. 三位一体の神はそれぞれ実存する者として書かれている

(1) 働きを他の位格のものにすることはできない

(a) ヨハネ3:35

(b) ヨハネ14:6

(c) ヨハネ14:10

(d) ヨハネ14:26

(2) それぞれが自らを「わたし」と言い、他を「あなた」と呼ぶことができる

c. 三位一体の神は存在、力、栄光において同等である

(1) それぞれが神と呼ばれている

(2) 同等性を現す関係が記されている（マタイ28:19; Ⅱコリント13:14）

E. どのように三位一体を導き出すか

1. 神は唯一の存在である

2. 唯一の本質（存在）が三位格にある

3. 三位格は同時に別人格として存在する

4. 父、子、聖霊はみな存在において同等である

5. 存在における三位一体と役割における三位一体は同じではない
   a. 存在における三位一体はそれぞれの存在において同等性を持っていることに言及している

   b. 役割における三位一体は聖書が教える三位一体の中にある優先順位、従属関係に言及している

   c. それゆえ、役割における三位一体は三位格それぞれが何をするかに関することであり、どのような存在であるかに言及するものではない